

資料翻訳と紹介

エヴァグリオス 新発見ギリシア語断片資料

鈴木 順

1. 解題

4世紀の教父エヴァグリオス・ボンティコス(345-399/400)¹の著作ギリシア語原典は、没後断続的になされた異端宣告ゆえに、神学・形而上学に関する作品は散逸し、修徳書は偽名・匿名での伝承を強いられた。しかし、文献学的研究の著しい進展によって、散逸・埋没したエヴァグリオス著作のギリシア語断片が、続々と発見・公刊されている。本稿では、Markesinis が2004年に発見・公刊した三点の資料を取り上げ²、若干の注釈を添えて翻訳・紹介するものである。これら三点のうち二点は、今日まで未発見の資料であり、今後のエヴァグリオス研究に大きく寄与するものと思われる。以下にその梗概を記す。

『観想に即しての主の身体の調和と彼に参与する者達について』

この作品に関する古代の証言はない。現在のところ、この作品を伝える写本の存在は、1105年に書写された *Vaticanus graecus 504*³以外確認されていない。当該写本は、『ディオニュシオス文書』とその注解(f.11r-76r)・証聖者マクシモスの著作の抜粋集(f.86v-150v, f.150v-154r)に大きく二分されるが、写本の中程に置かれた痛悔と修行を主題とする二種類の抜粋集の末尾に(f.81va-b), *Peri tēs kata theōrian harmonias tou sōmatos tou Kyriou kai tōn metoxōn autou*(『観想に即しての主の身体の調和と彼に参与する者達について』)なる表題のもと無名氏のものとしてこの作品が収録されている。内容は、キリストの肢体各部に関する寓意的な観想を金言形式で展開するものであるが、現存本文では、§7を除いて、キリストの頸部より上のみを扱っており本文の大幅な欠落が想定される。翻訳にあたっては、Markesinis による校訂テキストを底本とし⁴、節番号は底本にあるものを踏襲した。

『無表題断章』

この断章群に関する古代の証言はない。写本伝承については、13世紀に書写された *Scorialensis Ψ.III.8 (gr.463)*⁵(f.248v-250v)及び15世紀に書写された *Romanus, Angelicus gr.58*⁶(f.234v-250v)の存在が確認されている。表題・作者名について、写本は一切言及していない。Markesinis は、これらの写本が伝えるテキストについて、現存しない共通の祖型を推測している⁷。内容としては、キリストの誕生・受難・復活をめぐる寓意的な観想を断章形式でつづったものであり、『グノーシス的諸章』のキリスト論的断章群との並行関係が見いだされる⁸。翻訳にあたっては、Markesinis による校訂テキストを底本とし⁹、読解の便宜のため本稿執筆者

独自の判断で節番号を付しておいた。

Expositio in Parabolas et in Proverbia Salomonis (CPG2457) 断片

当該資料は、シリア語訳のみが伝承する *Expositio in Parabolas et in Proverbia Salomonis* (CPG2457) § 45のギリシア語断片である¹⁰。収録写本は12世紀末に書写された Oxoniensis, Bodleianus Cromwellianus 7 (olim Baroccianus 291)¹¹である。翻訳にあたっては、Markesinis による校訂テキストを底本とした¹²。

2. 『観想に即しての主の身体の調和と彼に参与する者達について』: 翻訳と注釈

2.1. 翻訳

無名氏作『観想に即しての主の肢体の調和と彼に参与する者達について』

§ 1 キリストの頭[I コリ11:3]とは、聖なる一性の本質的グノーシス(gnōsis ousiōdēs tēs hagias monados)である。これにふさわしいとされた者は、彼の「相続人(clēronomos)」【ロマ8:17】であり、それ(=聖なる一性の本質的グノーシス)が「永遠の命」【ヨハ17:3】であるがゆえに、「我々が一つである如く、彼らも我々において一つとなるであろう。」「【ヨハ17:11; 21-22】

§ 2 キリストの顔とは、聖霊の臨在である。これにふさわしいとされた者は、聖霊を視るだろう。

§ 3 キリストの両目とは、偽り無き諸観想である。一方は、聖三者についての観想、もう一方は、生成した諸事物一切についての観想である。

§ 4 キリストの両耳とは、父への聴従(hypakoē)である。一方は、諸々の戒め(entolai)への聴従、もう一方は、名状しがたい諸々の奥義への聴従である。

§ 5 キリストの鼻とは、聖霊の芳香(euōdia)である。これにふさわしいとされた者は、彼の婚宴の間(nymphōn)の内に居るであろう。

§ 6 キリストの口とは、霊の真理である。神的なロゴスに即して「ふさわしくないものから榮譽を引き離すならば」【LXX. エレ15:19】、「これと交わる者」【cf. II コリ13,13; フィリ2:1.】は、「子とされること(hyiothesia)」【cf. ロマ8,15】にふさわしいとされるであろう。

§ 7 キリストの両手とは、聖潔の接吻である。これと一つになる者は、純潔のうちに結ばれるであろう。

§ 8 キリストの歯とは、諸々の清い行為(praxeis katharai)である。これらを遂行する者は、乳よりもなお清い者【cf. 創49,12】になるであろう。

§ 9 キリストの舌とは、父の霊の黙示である。彼を愛する者は、彼と共に語らう者(synomilos autou)となるだろう。

§ 10 キリストの咽頭とは、霊的ロゴスの能力(dynamis)である。彼の肉を食する者は、これ(=霊的ロゴスの能力)によって¹³帰還させられるだろう¹⁴。【cf. 詩118,103】

§ 11 キリストの頸とは、「塔」【cf. 雅4:4; 7,5】、ロゴス的存在者達の「逃れの町(phygadeutērion)」【cf. ヨシュ20.2-3】である。彼の穏和さ(praotēta)を保つ者は、「復讐者の手」【申19.12】に決して陥ることはないであろう。

2.2. 並行箇所と注釈

§ 1. 注釈:(本質的グノーシス)この「本質的グノーシス」という表現自体と、「本質的グノーシス」と神性との同一視が、エヴァグリオスに固有のものであることは、Géhinによって指摘されている¹⁵。

並行・参考箇所:(グノーシス…「永遠の命」)**KG.IV.42(p.155)**「『百倍の約束』[cf. マタ 19.29]とは、諸存在の観想である。そして『永遠の生命』とは聖三者のグノーシスである。『唯一まことの神であるあなたを知ることこそ永遠の生命である』」**S-Ps. 62,4 (PG.12, 1488C2-3=KGI.73 [p.51])**「『蓋し、爾の慈憐は生命にまさり、我が両唇は爾を称えん。』人間の『生命』とは、聖なるグノーシスであり、主の『慈憐』とは生成した諸事物の観想である。」(グノーシス…「相続人」)**KG.III.72 (p.127)**「キリストの嗣業とは、一性のグノーシスである。もし、一切がキリストの共同相続人になるならば、一切は聖なる一性を知るであろう。だが、彼らがまず彼の『相続人』にならなければ、彼の『共同相続人』になることは不可能である。」**KG.IV.8 (p.139)**「キリストの『共同相続人』とは、一性に至りキリストと共に観想を享受する者のことである。」**KG.IV.9 (p.139)**「『相続人』と『嗣業』が別ものであるならば、『相続人』とは神—ロゴスではないのであり、キリストが嗣業たる神—ロゴスを相続するのである。というのも、誰であれ『相続人』は『嗣業』と一つになるからである。…」**S-Eccles.38,24-25.(p.130)**「ロゴスの本性にとって、神のグノーシス以外いったい何が『嗣業』でありえようか？」**S-Ps. 15, 3-4 (PG.12, 1213A3-4)**「ロゴスの本性の『嗣業』とは、生成した諸事物と生成するだろう諸アイオンについての観想である。キリストの『嗣業』とは、神のグノーシスである。」**S-Ps.36, 18 (1317C12-13)**「『彼らの嗣業は世々に至らん』ロゴスの本性の『嗣業』とは、神のグノーシスである。」**S-Ps. 44, 17 (1432D5-6)**「ロゴスの本性の『嗣業』とは、神のグノーシスである。」**S-Ps. 134, 7 (1653C 6)**「『彼は地を彼らの相続として与えた』もし、我々の『嗣業』が神のグノーシスであるならば、なぜこのようなことが言われるのか？」

(本質的グノーシス…一性)**KG.II.11 (p.65)**「…実際、本質的グノーシスたる聖三者あるいは一性を受容可能なる者の本性を知ることは、不可能なのである。」**KG.III.3 (p.99)**「一性とは、そのグノーシスが本質的であるキリストによってのみ恒常的に知られるものである」

(聖なる一性のグノーシス)**KG.IV.18 (p.143)**「可知的『塗油』とは、聖なる一性の霊的グノーシスであり、キリストはこのグノーシスに合一した者である。」

(一性のグノーシス)**KG.IV.21 (p.145)**「『塗油』とは、聖なる一性あるいは諸存在の観想を指し示す。もし、キリストが『他の者たちにまさって塗油された』のであれば、彼は明らかに一性のグノーシスによって『塗油された』のである。」**KG.I.77 (p.53)**「第二の本性は諸身体の印であり、第一の本性は魂の印である。知性とは、聖なる一性に合一した者たるキリストである。」**KG.43,1 (p.155)**「もし、はしごの上でヤコブに出現したキリストが自然的観想を示すならば、はしごの幻は修行の道行きについて教えているのである。しかし、もしキリストが一性のグノーシスを示すのならば、はしごは一切の諸世界の象徴である。」**S-Ps. 44, 3.(2), 1,4-5 (Pitra, III. P.40-41.)**「キリストは、他の者たちと彼の仲間らにまさって塗油されている。明らかに、彼は一性のグノーシスをもって塗油されている。」**Canones XV contra Origenem, 9 (ACO. IV, I, p.249, 17-18)**「陰府

に下り再び昇天したのは、ロゴスのかつヌース的な魂を具えた肉に受肉した神のロゴスではなく、ヌース——不敬にも彼らが「真にキリストである」と呼ぶ一性のグノーシスの故にキリストとなったヌース——であると主張するものは、誰であれ排斥される。」¹⁶

(「私とあなたがひとつである如く、彼らが我々のうちにひとつ…」)*Ep. Dogm., 7,51-55 (p.31)* 『彼らを恵みたまえ、父よ、私とあなたがひとつである如く、彼らが我々のうちにひとつでありますように』。というも、神は一(*heis*)であり、個々の存在者のうちに現存しつつ万有を統合するのであり、さらに一性(*monas*)の到来によって数は解消されるのである。』*Ps.-Maximus (Ioannes Scythopolitanus) Scholiae in corpus Areopagiticum. (PG.4, 76D13-77A7)* 「不敬虔なエヴァグリオスは、第二の『百章』の第三断章において以下のように言っている¹⁷。『彼は一性(*monas*)である。というも神性とは、純一(*haplous*)かつ分割不可能(*adiaireton*)なのだから。このゆえに、一性なのであり、さらに数的に言うなら一性であるがゆえに、純一(*haplē*)かつ合成されざるもの(*asynthetos*)である。このために、一性である。というも聖三者は本性的に自己自身に向かって統合しており、また福音書の『我々がひとつである如く、彼らがひとつとなりますように』という言葉によるならば、聖三者は自己と交わる者たち全てを統合するのである。』

(「相続人」)*Ad Monach.1 (p.153)* 「神の相続人達よ、神の言葉を聞け。キリストの共同相続人達よ、彼の言葉を聞け。[cf. ロマ8.16-17] 爾らの子らの心にそれらを与えるために、賢者の言葉を彼らに教えるために。』*S-Ps.105,5, 1-2 (Pitra, III.p.212)* 「爾の嗣業と共に賛美せしめよ」賛美すべき者とは、神の本性を相続する者である。』*KG.IV,78 (p.171)* 「キリストは相続しかつ相続される。だが、父はただ相続されるのみである。」

§ 2. 注釈: 聖霊の神性を強調するにもかかわらず、エヴァグリオスが聖霊について語ることは、一部の例外を除き(cf. *De Orat* 58,62.etc.), きわめてまれである。霊については、一貫して「子とする霊」という表現、または、形容詞「霊的な(*pneumatikē, pneumatikos*)」で言及する。

並行・参考箇所:(キリストの顔)cf. *S-Ps.4, 7, 3-5 (Pitra, II. P.454)* 『我々の上に爾の顔の光を輝かせよ、主よ』天使達は、常に神の顔を見る。人間達は彼の顔の光を見る。というも、主の顔とは、地上に生成する事物一切についての霊的観想であり、顔の光とはそれらについての部分的なグノーシスなのである。』*S-Ps. 29, 8(3) (PG.12, 1296C7-9)* 「この『顔』を天使達は常に見ている。…地上にある一切の事柄を天使達は知っており、『神の顔』とは、地上にある事柄についての諸ロゴスであり、彼のデーミウルゴスのなロゴスを刻印された者どもなのである。」

§ 3. 注釈: 神と被造物の仲介者としてキリストの側面を、目という認識論的なメタファーで強調している。

並行・参考箇所:(両目)*S-Prov.317,13 (p.408)* 「魂とその思惟像^{ノエーマ}に対して、聖書もまた種々な異なった名を与えている。(中略)『知性』・『魂』・『心』・『人間』・『夫』・『妻』・『奴隷』・『家人』・『父』・『息子』・『霊』・『目』・『口』・『手』・『舌』・『咽喉』・『胎』・…などである。」

(生成した諸事物についての観想)*De Malg. Cog.42, 1-6 (p.296)* 「悪霊的な諸々の想念^{ロギスモイ}は、生成した諸事物についての観想を受け取る魂の左目を盲目にする。…」*Ep.58, 7-8 (Fragmtum Graecum: p.143)* 「生成した諸事物の観想は多くの情報を有するが、聖三者の観想は、単一な形相のグノーシス(*monocidēs gnōsis*)である。なぜなら、本質的グノーシスは、

諸々のバトスと諸身体から裸になった知性に対してのみ輝きわたるものだから。」**KG.IV.21 (p.145)**『塗油』とは、聖なる一性あるいは諸存在の観想を指し示す。もし、キリストが『他の者たちにまさって塗油された』のであれば、彼は明らかに一性のグノーシスによって『塗油された』のである。」**S-Prov.378, 2-3 (p.468)**「大地と海についての諸ロゴスとは、ロゴスの魂の『上物の亜麻と紫の衣』【箴31,22】のことである。別のある者は、生成した諸事物の観想と聖三者の観想が、ロゴスの魂の『上物の亜麻と紫の衣』とであると云う。」

(聖三者)**S-Ps. 118, 65-66(1), 1.8-9 (Pitra, III, p.276)**「『慈しみを爾の下僕の上に為し給え、主よ、爾の言葉に従って。慈しみに^{パトリア}とグノーシスを我に与え給え、蓋し、我爾の諸々の戒めを信じたればなり』…『慈しみに』とは、神によって生成せしめられた事物についての真実なる^{ゲウシス}味わいであり、『訓育』とは、諸々のバトスのメリオパティアーのことであり、『グノーシス』とは、聖三者の観想のことである。」

(生成した諸事物一切)**S-Ps.144,3, 1.1-3 (Pitra, III, p.354 [=PG.12, 1673.A8-10])**「生成した諸事物一切についての観想は、減んでしまうであろう。他方、聖三者についての観想だけは、不滅なのである。」**S-Ps. 10, 16 (PG.12, 1196B13-14 & C4-5)**『主は世々に王たらん、而して世々の世に至らん。』蓋し、『その足下に彼の一切の敵を置くまで』世々にわたって『主は王たるべき』なのだから。彼の王国とは、生成した諸事物一切と生成するだろう諸アイオンの観想であり、これについての観想によって敵どもは友となるのである。」

§ 4. 注釈 (戒めへの聴従)これらの語を組み合わせた用例の存在は、本断章以外に確認できなかった。

並行・参考箇所:(戒め)**Ad Monach 92 (p.161)**「主の戒めを守る修道士は、幸いなるかな。」**Pract.79 (pp.667f)**「戒めを実行する諸行為 (hai energeiai tōn entolōn)」**Pract.81(pp.670f)**「戒めの遵守 (hē tērēsis tōn entolōn)が修行を成立させる。」

(聴従)**Ad Monach. 91 (p.161)**「自分の師父に聴従する者 (ho hypakouōn patri heautou)は、自分自身を愛する者。」

§ 5. 注釈:(聖霊の芳香)これらの語を組み合わせた用例の存在は、本断章以外に確認できなかった。また、救済や霊的完成の表象としての「婚禮(の間)」も、**Ad Virg.** 以外には見られないものである。

並行・参考箇所:(婚宴の間)**Ad Virg. 42 (p.149)**「姉妹を秘かに誹謗する処女は、婚宴の間から追い出されるであろう。…」

(芳香)**KG.II.35 (Fragmtum Graecum: Muyltermans, pp.58f.)**「知性もまた神的な五感を有する。…嗅覚 (hē osphrēsis)は、偽りとは全く無縁な芳香 (hē pantos pheidous amigous euōdia)を享受する。…」

(鼻…「キリストの芳香」)**Capitula. 11 (PG.40,1266B)**「鼻の欠陥 (kolobōsis rinos)[cf.レヴィ 21.18]とは、キリストの芳香 (euōdia tou Christou)[cf.II コリ2.15]を感じ取る徳の欠如のことである。」

§ 6. 並行・参考箇所:(口)**S-Prov.317, 13 (p.408)**

(「子とされること」)**KG.VI.51,3 (p.239)**「もし、魂の諸部分のうち、ロゴスの部分のみ知恵と合一するゆえに最も高貴であるならば、諸徳の第一はグノーシスのそれである。実際、我々の知

恵ある師はこれを『子とする霊』と呼ぶのである。』*S-Eccles.28,1-2* (p.106)「もし、人が兄弟を持たないならば、その人は『子とする霊』を持っていなかったのである。そして、もし人が父でないならば、彼は邪悪な者である。曰く『邪悪な者達には子孫が生じないように』。【箴24.20】当然、この人は、自己の魂を神のグノーシスから引き離しつつ、悪意に満足しない。さて、ここで私が云う父と兄弟とは、聖書の思考に即したそれである。』*S-Prov., 78,1* (p.176)「『兄弟』とは、『子とする』恩寵を持つ者達であり、彼らの上にキリストを父として有する者達である。』101, 6-7 (p.200)「知恵は聖霊の最初の賜物である。『知恵の言葉を賜るのはまさに聖霊による』からであり【Iコリ12.8】、またこの同じ賜物(=知恵)は『子とする霊』とも呼ばれるのである。』163, 4 (p.260)「もし、キリストの息子達が互いに兄弟であるなら、天使達と義人達はキリストの息子達である。天使達と義人達は、『子とする霊』において、互いに兄弟である。』169,5-6 (p.264)「…何故なら、もし悪意と無知の内に子供を死なせるならば、『産む者』ではあっても『母』ではない。というのも、子供もまた『子とする霊』に与っていないからである。』210,2 (p.306)「相^{エビノア}の観点からは、キリストは父でも母でもありえる。『子とする霊』を保つことで彼は父であり、固い食べ物ではなく飲み物としての乳【ヘブ5.12参】を持つ者として母である。というのも、パウロにあって語るキリストは【IIコリ13.3参】、秘儀と知恵を示してエフェソ人の父となり【エフェ3.1-19】、飲み物としての乳を与えてコリント人の母となったのである。【Iコリ3.2】』*S-Ps.24, 16* (PG.12, 1272C7)「『我に目を注ぎ、我を憐れみ給え。蓋し、我は孤独にして貧しければなり』。神のグノーシスの故に一切を行い語る者は、常に魂の両目を主に向けて保つ。もし、『子とする霊』を持たず、聖なる諸力とキリスト自身を友としないならば、グノーシスの豊かさを剥奪された者は、『我は孤独にして貧し』と言うはずである。」

§ 7. 並行・参考箇所:(両手)*S-Prov. 317, 13* (p.408)

§ 8. 注釈:(行為^{プラクシス})修道・修徳の実践を意味する語として、エヴァグリオスは、一貫して *praktikē/praktikos* の語を用いている。この箇所に見られる *praxis* の用例は、きわめてまれである。

並行・参考箇所:(行為^{プラクシス})*S-Prov. 224* (p.318)「『漆喰塗りの家・同じ家』と『戸外の片隅』が対比されている【箴21.19】。もし、『漆喰塗りの家・同じ家』が悪意ならば、『戸外の片隅』とは徳ということになる。この『戸外の片隅』とは、観想を具えた行為(*praxis theōprias ephaptomenē*)であり、『義の太陽』【マラ3.20】によって輝かされるものである。」

§ 9. 注釈:(共に語らう者)*De Orat.*の並行箇所における用例(対格)とは異なり、ここでは対話相手の格が属格となっている。

並行・参考箇所:(共に語らう者)*De Orat. 3-4* (PG.79, 1168C-D)「祈りとは、神に対する知性の語りかけ(*homilia*)である。…彼と語り合うこと(*synomilein auōi*)以外、知性にとって何が必要であるうか?」「…一切の思惟と感覚を凌駕する者を見て、彼と共に語らう者(*synomilos autōi*)になることを望む君は、なぜ情念的表象像から自己を解放放たないのか?」*Tract. 20* (Sinkewicz, p.323)「畏敬のうちに日ごとに神的な書の対話者(*tōn theiōn graphōn synomilos*)となれ…」

(舌…霊の)*S-Ps. 15,9* (PG.12, 1216A11-B2)「…ここでは、聖霊の恩寵が『舌』と呼ばれる。」

(舌)S-Prov. 317, 13 (p.408)

§ 10. 注釈:(霊的ロゴスの能力・・・彼の肉)一見つながらない両者であるが、以下の並行箇所からも窺えるように、エヴァグリオスにとってエウカリストニアとは、徳ないしはある種の観想の象徴である。

並行・参考箇所:(彼の肉)Ad Monach. 118 (p.163)「キリストの肉は修行的諸徳。これを食す者は不動な者となる。」S-Eccles. 13, 1-3 (p.78)「一体誰が、キリストを離れて、諸徳の象徴である所の彼の肉と血を食べかつ飲むことができようか？」S-Prov.77,1-3 (p.174)。「キリストの肉を食い彼の血を飲む一切の者は、義人の血を持つ。それを剥奪されたロゴスの魂は死ぬ、と云われている。曰く「罪を犯す魂は死なねばならない。」【エゼ18.20】Ep. Dogm.4.20-27 (pp.27ff)。「彼の肉を食べ彼の血を飲む者は、彼の人間化と可感的生を通じて、ロゴスとソフィアに交わる者となるのである。なぜなら、彼はその秘儀的滞在全体を「肉と血」と呼ぶからである。そして、魂を養い、さしあたってはく諸存在の観想へ魂を整えるく修行と自然学と神学から成立する教えを明らかにするのである。」

(咽頭)S-Prov., 317, 13 (p.408)

§ 11. 注釈(ロゴスの存在者達の「逃れの町」)以下にあげる KG. IV.82から類推するならば、ここで語られる「キリストの咽」とは、その身体性を指すものであろうか？

並行・参考箇所:(ロゴスの存在者達の「逃れの町」)KG. IV.82 (Fragmentum Graecum: Furrer-Pillod, p.208)「『逃れの町』とは、自己を包囲する悪霊達から逃れるための、バトスの魂の修行的身体である。」

(咽)S-Prov.7, 1-3 (p.96)「『頭の頂き』と『咽』とは知性を示す。同様に『冠』と『首飾り』はグノーシスを示す。実際、聖霊はいくつかの語でもって、神とその天使達、知性、徳とグノーシス、悪意と無知、悪魔とその眷属共を示すのである。」34, 1-2 (p.128)「主の水瓶を担う魂【cf. マタ 11.28-30】は、『咽』と呼ばれる。」

3. 『無表題断章』: 翻訳と注釈

3.1. 翻訳

§ 1 キリストの誕生とは、童貞女バルテノスからの神のロゴスの合成された誕生(synthetos gennēsis)である。

§ 2 キリストの襁褓にくるまれること【cf. ルカ2,7】とは、我々の「新しき人」【cf. エフェ4,24, コロ3,10】をまとって包まれることである。

§ 3 キリストの十字架とは、「多彩な知恵(polypoikilē sophia)」【エフェ3,10.】の四方に展開する(tetramerēs)【cf. エフェ3,18】顕現であり、あるいは、我々の「新しき人」【cf. エフェ4,24, コロ3,10】の能力であり、悪意の最終的な解消(ponērou teleia katalysis)である。

§ 4 キリストの復活とは、ロゴスの本性の腐敗から不朽性【cf. I コリ15,42;53-54】への置き換え(metathesis)であり、そして、無知から諸存在に関する迷妄無きグノーシス(aplanēs gnōsis)への置き換えである。

3.2. 並行箇所と注釈

§ 2 並行・参考箇所(「新しき人」…「古き人」)*De Malg. Cog. 39, 1-2 (p.286)*「知性が『古き人』を脱ぎ捨て神に由来する[新しき人]を身にまとう時、祈りの折に知性は自身に固有の状態を見るであろう。」*Ep.39 (p.592, 19-21 [p.593, 23-25])*「もし、神の恩恵によって知性がこれらのもを退けるならば、そして『古き人』を脱ぎ捨てるならば、知性は祈りの折に自己の状態を、天空の色に似た何かを、そして、シナイ山で長老達が見たと聖書にある『神の場』【出エジ24.9以下】を見るであろう。」

§ 3 注釈:(「多彩な知恵」)エヴァグリオスは、質料的被造物の造物主を、神自身ではなく、神—ロゴスと合一した知性たるキリストであるとし、このキリストをく知恵—キリスト論>の伝統に即して「知恵」と呼ぶ^{ソフィア}18。「神の知恵(Sophia tou theou)」キリストが、創造にあたって用いる存在—認識論的原理もまた「知恵(sophia)」と呼ばれる。そして、この「知恵」は、以下に列挙する断章に見られるように、頻りに形容詞「多彩な(poikilē/polypoikilē)」を伴って言及される。この形容詞(特に polypoikilē)は、キリスト—ソフィアが、本質的に関与する質料的世界と被救済者の多様性を示唆する。

並行・参考箇所(「多彩な知恵」)*KG. I,43 (p.39)*「神は遍在し、[特定の]場所にいるのではない。彼は創造した一切のうちに、『多彩な知恵』を通じて、遍在する。」*KG.II,2 (p.61)*「第二の自然的観想において、我々は、キリストの『多彩な知恵』を見る。それは、諸世界の創造にあたって彼が用いたものである。」*KG.II,21 (p.69)*「生成した一切は、神の『多彩な知恵』を告げる。…」*KG. III.11 (p.103)*「有体的本性は、キリストの『多彩な知恵』を受けるが、彼自身を受容し得ない。…」*KG. III.81 (p.131)*「神を知る者は、彼が一切を創造するにあたって用いたところの、その本性のグノーシス、もしくはその『多彩な知恵』のグノーシスを保つ。」*KG.IV, 7 (p.139)*「諸存在のうちに『多彩な知恵』を置いた者は、容易にその観想者となる術をも、それを望む者に教えるのである。」*KG. V, 84 (Fragmentum Graecum: Furrer-Pillod, p.155)*「可知的神殿とは、一時的に置かれた神の『多彩な知恵』を自己の内に保つ清い知性のことである。…」*S-Eccles. 18,1 (p.88)*「『多彩な知恵』からは何一つ取り去ることも、付け加えることもない。曰く、彼がそれをつくったのは、人々がグノーシスによって触発されて悪から解放されるためにであった。『何故なら、主への畏敬によって、万人は悪から離れる』。【箴 15.27a】」*S-Prov.333,1 (p.422)*「不受動なる知性は、『多彩な知恵』を楽しみ、欲望的な知性は無知に沈む。」*S-Ps. 3,4(1), 1.2 (Pitra, II, p.450)*「爾は、主よ、我が盾、我が栄光。我が頭を高かめ給う者なり」。神の『多彩な知恵』に専念するならば、その時、知性は高められる。」;*S-Ps. 44, 10 (PG.12, 1432B2)*「ロゴス的本性の『上着』とは、神の『多彩な知恵』のことである。」*S-Ps. 122,1 (1633C5)*「神は、その『多彩な知恵』を通じて、有体的諸天においてデーミウルゴスとして住まう。」*Ad Monach.135 (p.165)*「諸世界の諸観想は心を広げ、摂理と審判の諸ロゴスは心を高める。」

(四方に展開する顕現)*S-Prov. 33, 1-7 (p.126)*「ここで『地』と云うのは、聖パウロ『広さ』と名づけるものであり、ここで『諸天』と呼ばれるのは、彼が『エフェソ人への書簡』で『高さ』と呼ぶものであり、比喩的に『深淵』と呼ばれるものを、彼は『深さ』と名づけるのである。露を滴らせる『雲』は、『長さ』と呼ばれるのである。【エフェ3.18参】これらすべては、状態の類比に即して相

違するところの、ロブスの本性違の世界と諸身体の象徴なのである。」153, 7-12 (p.248)
 (悪意の最終的な解消) **KG. VI.40 (p.233)**「キリストの十字架刑とは、我々の『古き人』の滅却、我々に対する断罪の破棄、そして、我々を生命へと再び導く赦しである。」**KG. I.40. (Fragmentum Graecum: Muyldermans, pp.57f.)**「悪意(kakia)が存在しない時がかつてあり、悪意の存在しない時が将来くるだろう。徳が存在しない時がかつてなく、徳の存在しない時が将来来ることもないだろう。…」

§ 4 注釈:(キリストの復活) **Romanus, Angelicus gr.58**の読みは単に「復活」となっている。主体の靈的向上・認識の回復を「復活」とすることは、以下に列挙する断章にも見られるように、エヴァグリオスにとって基本的な「復活」理解であり、ことさらに「キリスト」を持ち出す必要もない。おそらく、この断章の元来のテキストでは「キリストの」という語は無く、現在の写本に見られる形に編纂された時に事後付加がなされた可能性がある。

並行・参考箇所(復活) **Ep. Dogm. 7.29-35 (p.30)** 「…さて、我々の主ご自身もまた、ロブスの相エビノアに即しては究極ヘー・エスカテー・マカリオテースの至福である。では、彼は福音書において何を語っているのか? 『私は終末の日において彼を復活させよう』。【ヨハ6.40】彼は、質量的グノーシスから非質量的親想への移行(*hē apo tēs ennylou gnōseōs epi tēn aylon theōrian metabasis*)を『復活』と呼び、その後には他のものが存在しないグノーシスを『終末の日』と呼ぶのである。」**KG.V.19, 22, 23 (pp.185, 187)**「身体の復活とは、悪しき性質から靈的性質への移行である。」「魂の復活とは、パトスの位階からアパテイアの位階への移行である。」「知性の復活とは、無知から真実なるグノーシスへの移行である。」**Paraen.39 (Fragmentum Graecum: Furerr-Pillod, p.189)**「安息日とは、キリストと共にある復活の期待にあって、彼のうちに諸々のパトスからアパテイアの安息へと埋葬された者達の象徴である。」

4. *Expositio in Parabolas et in Proverbia Salomonis* 断片: 翻訳

§ 45 聖三者を礼拝し、これに伏拝せよ。「そうすれば、命の日々が汝に増し加えられるであろう。」【箴9.11】

エヴァグリオス著作略号一覧

Ad Monach.: *Sententiae ad Monachos.* H. Gressmann ed., *Nonnenspiegel und Mönchsspiegel des Evagrius Pontikos.* Texte und Untersuchungen 39.4. Leipzig: Hinrichs, 1913. pp.152-165.

Ad Virg.: *Ad Virginem.* H. Gressmann, op. cit. pp.143-151.

Capitula: *Capitula XXXIII.* PG.40, 1264D-1268B.

De Malg. Cog.: *De Malignis Cogitationibus.* P. Géhin, A. & C. Guillaumont, eds. *Sur les pensées.* Sch.438. Paris: Cerf, 1998.

De Orat.: *De Oratione.* PG.79, 1165-1200.

Ep.: *Epistulae. (Versio Syriaca)* W. Frankenberg, ed. *Evagrius Ponticus.* Abhandlungen der Königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen and

Philologisch-Historische Klasse, n.s. 13.2. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1912. pp.564-611. (**Fragmenta Graeca**) P. Géhin, ed. "Nouveaux fragments grecs des lettres d'Évagre." *Revue d'Histoire des Textes* 24 (1994): 117-47.

Ep.Dogm.:Sermo sive Dogmatica Epistula de Ss. Trinitate. Y. Courtonne, ed. & trad., *Saint Basil: Lettre*, tom.1. Paris, 1957. pp.22-37.

KG:Kephalaia Gnostica. (Versio Syriaca) A. Guillaumont, ed. *Les six centuries des "Kephalaia Gnostica."* *Patrologia Orientalis*, 28.1. Paris: Firmin-Didot, 1958. (**Fragmenta Graeca**) J. Muyldermans, ed, *Evagriana, Extrait de la revue Le Muséon 44, augmenté de: Nouveaux fragments grecs inédits.* Paris: Paul Geuthner, 1931. pp.52-59. ; Ch. Furrer-Pillod, ed. *Horoï kai Hypographai, Collections alphabétique de définitions profanes et sacrées*, ST. 395, Vatican, 2000. pp. 72, 74, 79, 85, 92, 94, 96, 106, 123, 124, 131, 138, 140, 145, 150, 151,155, 165, 169, 174, 175, 176, 178, 179, 181, 189, 194, 200, 208, 211, 214.

Paraen.: Paraenesis. (Versio Syriaca) J. Muyldermans, ed, *Evagriana Syriaca. Textes inédits du British Museum et de la Vaticane.* Bibliothéque du Muséon 31. Louvain: Publications Universitaires, 1952. (**Fragmenta Graeca**) Furrer-Pillod, op cit, pp.85, 92, 131, 140, 177, 179, 189, 194.

Pract.: Practicus. Traité pratique ou le moine. SCh. 170-71. Paris: Cerf, 1971.

S-Eccles: Scholia in Ecclesiasten. P. Géhin, ed., *Scholies à l'Ecclésiaste.* SCh.397. Paris: Cerf, 1993

S-Prov.: Scholia in Proverbia. P. Géhin, ed., *Scholies aux Proverbes. Introduction, texte critique, traduction, notes, appendices et index.* SCh.340. Paris: Cerf, 1987.

S-Ps.: Scholia in Psalmos in catenis editis sub nomine Origenis. (a) PG.12, 1054-1686. (b) I. B. Pitra, *Analecta Sacra Spicilegio Solesmensi parata*, t. II, *Patres Antenicani*, Typis Tusculanis, 1884 (sic), pp.444-483, t. III, *Patres Antenicani*, Ex typographaeo Veneto Mechitaristarum S. Lazari, 1883, pp. 1-364.

Sk.: Skemmata. J. Muyldermans, ed, *Evagriana, Extrait...*1931, pp.38-44.

Tract.: Tractatus ad Eulogium. R. E. Sinkewics, ed., trans., *Evagrius of Pontus: The Greek Ascetic Corpus.* Oxford, 2003. pp. 300-333.

その他略号

ACO.: *Acta Conciliorum Œcumenicorum*, ed., E. Schwartz, Berlin, 1914-1940; ---J. Straub, 1971-1984; ---R. Riedinger, 1984-1995.

CPG: *Clavis Patrum Graecorum*, ed., M. Geerard, in 6vols. Turnhout: Brepols, 1974-1998.

PG: *Patrologia Graeca*

SCh.: *Sources Chrétiennes.*

ST.: *Studi e Testi*

- ¹ エヴァグリオスの生涯・教説の梗概等に関しては、鈴木順「資料翻訳と紹介 エヴァグリオス・ボンティコス『スケンマタ』」東京大学宗教学年報, 21号, 2003年, 167-178頁, 特に167-168頁を参照。
- ² B. Markesinis, “Evagriana dans le VATICANUS GRAECUS 504 et ailleurs”. In B. Janssens (et als., eds.), *Philomathestatos: Studies in Greek Patristic and Byzantine Texts Presented to Jacques Noret for his Sixty-Fifth Birthday*, Orientalia Lovaniensia Analecta 137, Peeters, 2004, pp.415-434.
- ³ Cf. P. Canart-V.Peri, *Sussidi bibliografici per i manoscritti greci della Bibliotheca Vaticana*, ST. 267, Vatican, 1970, pp.440f.; M. Buonocore, *Bibliografia dei fondi manoscritti della Bibliotheca Vaticana (1968-1980)*, II, ST. 319, Vatican, 1986, pp.831ff.; M. Ceresa, *Bibliographia dei fondi manoscritti della Bibliotheca Vaticana (1981-1985)*, ST. 342, Vatican, 1991, p.346; Id., *Bibliographia dei fondi manoscritti della Bibliotheca Vaticana (1986-1990)*, ST. 379, Vatican, 1998, p.433.写本の詳細については、R. Devreesse, *Codices Vaticani graeci. Codices 330-603 (Bibliothecae Apostolicae Vaticanae codices manuscripti recensiti)*, Vatican, 1937. pp.338-349. を参照。
- ⁴ Markesinis, op cit, pp.417-418.
- ⁵ Cf. G. de Andrés, *Catálogo de los Códices Griegos de la Real Bibliotheca de El Escorial, III, Codices 421-649*, Madrid, 1967, pp.65-67; K.-H. Uthemann, *Anastasio Sinaitae Viae dux* (CCSG, 8), Turnhout-Louven, 1985, pp.LXII, CCXXIV, n.17.
- ⁶ Cf. G. Muccio & P.Franchi de' Cavalieri, “Index codicorum graecorum Bibliothecae Angelicae”, *Studi Italiani di Filologia Classica* 4, 1896, pp.106-109. rep. in Ch. Samberger, ed., *Catalogi codicum graecorum qui in minoribus bibliothecis italicis asservantur in duo volumina collati et novissimis additamentis aucti (Catalogi codicum graecorum lucis ope reimpressi)*, II, Leipzig, 1968, pp.120-123.
- ⁷ Markesinis, op.cit, pp.426f.
- ⁸ KG VI.38, 39, 40, 42. (pp.233,235)
- ⁹ Markesinis, op cit, p.428.
- ¹⁰ シリア語校訂版: J. Muyldermans, *Evagriana Syriaca. Textes inédits du British Museum et de la Vaticane*. Bibliothéque du Muséon 31. Louvain: Publications Universitaires, 1952. pp.137f.
- ¹¹ Cf. H.O. Coxe, *Catalogi codicum manuscritorum Bibliothecae Bodleianae pars prima, recensionem codicum graecorum continens*, Oxford, 1985, coll.425-427.
- ¹² Markesinis, op cit, p.431.
- ¹³ 校訂者の提案にしたがい hypo を補って読む。
- ¹⁴ 校訂者の提案にしたがい, 写本の読み nosthēsetai ではなく nostēthēsetai と読む。
- ¹⁵ P. Géhin, “La Place de la Lettre sure la Foi dans l’Oeuvre d’Evagre.” In P. Bettolo, ed. *L’Epistula fidei di Evagrio Pontico. Temi, contesti, sviluppi. Atti del III Convegno del Gruppo Italiano [1998, Pragia, Italy] di Ricerca su "Origene e la Tradizione Alessandrina."* Studia Ephemeridis Augustinianum 72. Roma: Institutum Patristicum Augustinianum, 2000, pp.25-58, esp. pp.51f.
- ¹⁶ 訳文は、小高毅編訳『原典キリスト教思想史2 ギリシア教父』教文館, 2000年, 437頁。但し, 表記は一部改変した。
- ¹⁷ ここで擬マクシモス(スキュトポリスのイオアンネス)がKG.II.3として引用するテキストは, 現行のKG本文と全く一致していない。
- ¹⁸ Cf. *S-Eccles.43* (p.138), *S-Prov.300* (p.392)